（ 続紙 1）

京都大学	博士（地域研究）	氏名	石田　友梨
論文題目	インドにおけるイスラーム改革思想とスーフィズム －シャー・ワリーウッラーをめぐる学者ネットワークからの考察－		

（論文内容の要旨）

本論文は、18 世紀におけるイスラーム改革思想を、スーフィズムに主たる焦点を当て、インドの思想家シャー・ワリーウッラー（Shāh Walī Allāh, 1114/1703-1176/1762）を事例に考察するものである。

シャー・ワリーウッラーはムガル朝下に生きたが、この時代ムガル朝は、各地で反乱が相次ぎ、徐々に衰退に向かいつつあった。そのような危機の時代にあり、イスラームによる統治を唱えたのがシャー・ワリーウッラーであった。シャー・ワリーウッラーの主著である『究極のアッラーの明証（*Ḥujja Allāh al-Bāligha*）』は、イスラーム諸学の最高学府であるエジプトのアズハル大学で教科書として採用されるなど、現代でも南アジアを中心に広く読み継がれている。また、シャー・ワリーウッラーは、クルアーンの原語であるアラビア語を母語としない南アジアにおいて、ムスリムがその内容を理解することができるように、当時の公用語であったペルシア語に翻訳した功績でも知られている。

一方、アラビア半島においてはムハンマド・イブン・アブドゥルワッハーブ（Muḥammad ibn ‘Abd al-Wahhāb, 1115/1703-1206/1791）がイスラーム改革を進めていた。同じ時期にインドとアラビア半島で生まれたイスラーム改革思想について、従来ふたつの見方がされてきた。ひとつは、両者に関連がないとする立場であり、もうひとつはアラビア半島のイスラーム改革思想がインドへ伝わったとする立場である。

前者によれば、シャー・ワリーウッラーの改革思想はインドの先達アフマド・スィルヒンディー（Aḥmad Sirhindī, 971/1564-1034/1624）のそれを受け継ぐ、インド独自のものである。この立場からすれば、インドにおけるイスラーム改革は、ヒンドゥー教徒への対抗という意味合いを強くもつものということになる。

他方後者は、17-18 世紀のアラビア半島を中心とした学者のネットワークによって、イスラーム世界各地にイスラーム改革思想が伝わったとする。しかし、学者ネットワーク論の問題として、その中心地であったアラビア半島出身のムハンマド・イブン・アブドゥルワッハーブがスーフィズムを否定したことが、スーフィズムを重視するイスラーム改革の主流の思想と相容れないことの説明がつかないということが指摘できる。

以上をふまえ、本論文はインドとアラビア半島の双方におけるシャー・ワリーウッラーの師弟関係に着目することで、インドにおけるローカルな知の伝達と、アラビア半島からのグローバルな知の伝達の交差したところに、シャー・ワリーウッラーのイスラーム改革思想を位置づけることを目指す。

本論文は 4 章からなる本文と序章・終章で構成されている。序論においては、学者ネットワークという観点からイスラーム改革思想を捉える先行研究を整理し、その問題点を指摘する。

第一章は、イスラーム世界各地への学者ネットワークの広がりを描写し、そのなかでのシャー・ワリーウッラーの位置づけを示す。第二章は、シャー・ワリーウッラーの家系を辿り、一族がインドに基盤を築いていく過程を追っている。その際に、家業となるマドラサの教育内容についても検討を行っている。第三章では、シャー・ワリーウッラーが傾倒したナクシュバンディー教団（スーフィズムに基づく教団のひとつ）の師弟関係を明らかにし、アフマド・スィルヒンディーとのつながりを示している。

これらを受けて第四章では、学者ネットワークの両翼とされるハディース学とスーフィズムに対するシャー・ワリーウッラーの見解について、原典に基づき明らかにしている。ハディース学については、クルアーンとスンナに基づくことを重視する姿勢が、学者ネットワークと一致していることを示す。スーフィズムについては、インドにおける師とアラビア半島における師の教えを紹介しながらも、最終的にはそのどれとも一致しない、シャー・ワリーウッラー独自の見解に達していることを示す。

結論では、シャー・ワリーウッラーが学者ネットワークの主流派とほぼ意見を同じくしながらも、インドの状況に合わせて柔軟に思想を展開させていたことを指摘する。たとえば、個人がクルアーンから直接答えを導き出すことを奨励しながらも、インドのムスリムにとってアラビア語が母語でないことに鑑み、クルアーンの翻訳を行ったことが挙げられる。また、スーフィズムの議論からは、シャー・ワリーウッラーが自ら生きる時代を悲観していなかった証拠を示す。これは、ヒンドゥー教徒に脅かされるインドのムスリムのためにイスラーム改革を唱えたとする従来のシャー・ワリーウッラー像に再考を迫るものである。シャー・ワリーウッラーの思想が、インドという局地からだけではなく、イスラーム共同体という大局からも検討すべきものであること、そしてアラビア半島からの影響のみによって成立したものでないことを、本論文は明らかにしている。

（続紙　２）

（論文審査の結果の要旨）

本論文は、18 世紀に起ったとされるイスラーム改革について、南アジアにおけるその担い手として著名なシャー・ワリーウッラーを事例に再検討しようとするものである。

アラビア半島における改革を担ったムハンマド・イブン・アブドゥルワッハーブ（以下、イブン・アブドゥルワッハーブ）と、このシャー・ワリーウッラーの両名は、この時代のイスラーム改革の代表的人物と理解されてきたが、どちらかといえば、前者に焦点を当てた研究が中心を占めてきた。これは、いわゆる「イスラム原理主義」につながる流れの原型をイブン・アブドゥルワッハーブが築いたからであり、今日の「イスラム原理主義」への関心の強さが、そのまま過去の評価にも影響を及ぼしていると考えられる。本論文は、このような理解に異を唱え、新たな見地を提供しようと試みている。

本論文の学問的貢献は、以下の三点に集約される。

学問的貢献の第一は、イスラーム改革研究におけるものである。上述のように、イブン・アブドゥルワッハーブをクローズアップする形で研究は進展してきているが、この時代のイスラーム改革は、ハディース（預言者ムハンマドの言行録）に関する学問（ハディース学）とスーフィズムを両輪として進められたと理解すべきである。イブン・アブドゥルワッハーブは、伝統的なハディース学を批判するとともに、スーフィズムをも否定する立場をとる。これに対して、シャー・ワリーウッラーは両者の改革を唱えたと考えられる。このことを元に、申請者は、後者がよりこの時代のイスラーム改革の主流に位置したと考え、イスラーム改革を検討する際に、イブン・アブドゥルワッハーブよりもシャー・ワリーウッラーを中心として再検討すべきことを主張している。このことは、イスラーム改革研究に新たな視座を提供するものと評価することができる。

学問的貢献の第二は、シャー・ワリーウッラー研究におけるものである。この思想家は、今日に至るまで高く評価され続けているが、どちらかといえば、南アジアの文脈で理解されがちであった。今日のパキスタンがイスラームを理念として成立して以降、彼の功績が称揚されるようになったが、ここでは、イスラーム国家パキスタンの祖型を築いた思想家として、彼は評価されることになる。しかし申請者は、彼の思想史上の重要性を、南アジアの文脈に閉じ込めることなく、イスラーム世界全体のなかで捉え直すべきだと主張する。イスラーム世界を大きく転換させる契機となったイスラーム改革の主流にこそ彼を位置づけるべきだという主張は、説得力の強いものである。

学問的貢献の第三は、当時の学者ネットワークという外形的な事実と、シャー・ワリーウッラー自身が著した原典の読解に基づく思想的な内面的理解の両方を、検討の俎上に載せている点である。完全な整合的理解のためには、事実をさらに積み重ね、実証性を増す必要があるものの、本論文はその基本的方向性を示している。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 26 年 1 月 10 日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第 14 条第 2 項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。